

うちむらんぞう だいひょうてきにほんじん
内村鑑三著「代表的日本人」岩波文庫、岩波書店 1995年7月17日刊を読む

昔の日本の教育

1. 「私たち西洋人が諸君の救済に訪れるまで、諸君は日本でどのような学校教育を受けられていた
のであるか。日本人諸君は異教徒にしてはもっとも賢明な国民にみえる。今日の諸君があるには、
さぞかし道徳的、知的な教育を受けてきたにちがいない」
2. このような質問に、私どもが母国を離れ、はじめて西洋の文明人のなかに立ちまじったとき、た
びたび出会います。それに対して私どもは、おおよそ次のように答えてまいりました。
3. 「そう。私どもには学校教育があった。それもなかなかのものだ。私どもは「十戒」のうち少な
くとも八戒は、母の膝にいる間に父の口から学んでいるのである。力は正義ではないこと、天地は
利己主義のうえに成り立ってはいないこと、泥棒はいかなるものでもよろしくないこと、生命や財
産は、結局のところ私どもにとり最終目的にはならないこと、その他多くのことを知った。
4. 学校もあり教師もいたが、それは諸君の大いなる西洋にみられ、今日わが国でも模倣しているよ
うな学校教育とは、まったくちがったものである。まず第一に、私どもは、学校の知的修練の売り
場とは決して考えなかった。修練を積み重ねれば生活費が稼げるようになるとの目的で、学校に行かされ
たのではなく、真の人間になるためだった。私どもは、それを真の人、君子と称した。英語でいう
ジェントルマンに近い。
5. さらに私どもは、同時に多くの異なる科目を教えられることはなかった。私どもの頭脳が一葉し
かないことには変わりなく、沢山はないのである。昔の教師は、わずかな年月に全知識を詰め込ん
ではならないと考えていたのである。(これは賢明なことと思う。)これが私どもの昔の教育制度の
すぐれた特徴の一つだった。
6. 「歴史」「詩」「礼儀作法」もある程度教えられたが、おもに教えられたのは「道徳」、それも実
践道徳であった。観念的、あるいは神智学的、神学的な道徳は、私どもの学校では決して強いられ
なかった。我が国の仏教学者たちは、たしかに山の岩窟のなかにこもり、伝説上の亀の甲に毛が何
本あるかとか、そのほか重箱の隅を突つくようなことを論じている。だが、下界の平野に住み、
人間の実際問題とつきあわなくてはならない私どもは、そのような問題にわずらわされる必要はな
かった。一言でいうと、私どもの学校では神学は決して授からなかったのである。それを学びたい
なら、寺へ通えば授けてくれる。学校には、他の国でよくみられるような教派上の争いはなかった。
これも私どもの昔の教育制度がもっていた、別のよい特徴の一つである。
7. さらに私どもは、クラスに分けて教えられることもなかった。魂をもつ人間をオーストラリアの
牧場の羊のようにクラスに分けるようなことは、昔の学校ではみられなかった。人間は分類してま
とめることのできないもの、一人一人、つまり顔と顔、魂と魂とをあわせて扱われなくてはならな
い、と教師は信じていたように私には思われるのだ。それだから教師は、私どもを一人一人、それ
ぞれのもつ肉体的、知的、霊的な特性にしたがって教えたのである。教師は私どもの名をそれぞれ
把握していたのである。ロバと馬とが決して同じ引き具を着けられることはなかったので、ロバが

叩きのめされて愚かになる恐れもなければ、馬が駆使されるあまり秀才の早死に終わる心配もなかった。現代にみられるような適者生存の原理にもとづく教育制度は、寛大で人を愛する君子(gentleman)の養成には向いていないように思われた。したがって、この点に関しては、私どもの昔の先生は、教育理論のうえではソクラテスやプラトンと同意見だった。

8. そのため、当然、教師と生徒の関係は、もっとも濃^{こま}やかだった。教師を、あの近づきがたい名称である教授と呼ぶことはなかった。先に生まれたことを意味する「センセイ」と呼んだ。この世に生まれた時点で先一必ずしもそうでないこともあったが一であるのみならず、真理を先に了解した点で、先に生まれたことになるからである。その結果、センセイには最高の尊敬がはらわれていた。それは、両親や藩主に対する尊敬と変わりなかった。実にセンセイと両親とキミ(主君)とは、深い尊敬をはらうべき対象の三位一体をなしていた。日本の若者にとり、頭を悩ます最大の難問は、この三者がまさに同時に溺れんとしているときに、自分が一人しか助ける力がないとしたら、はたしてだれを真っ先に助けるかという問題だった。したがってデシがセンセイのために生命をなげだす行為は最高の美德とされた。ところが、現代の教育制度にあって教授のために学生が死んだ話を聞いたことがない。

9. 私どもの頭のなかには、このセンセイとデシとの関係があったから、キリスト教の聖書にみられる師と弟子との親密な関係^{しもべ}を、ただちに解することができた者もあったのである。聖書に、弟子は師にまさることなく、僕は主人にまさることなく、よき羊飼いは羊のために生命をすてる、などと書かれてあるのをみて、私どもは、ほとんど直観的に、それははるか昔からわかっていたのである。それとともに、師とはただの教授であり、弟子とはただの学生としか念頭にないキリスト信徒が、私どもに教えようとする聖書の教えをはたして理解できているものか、怪しいものだとよく思ったのである。

10. 私どもは、古いものがあらゆる面で新しいものより優^{すぐ}れていると言うわけではない。ただ、古いものが必ずしもすべて悪いものではなく、新しいものが必ずしもすべて良いものでも完全なものでもないと言うにすぎない。新しいものには、まだ改良される余地があり、古いものには、まだ再活用される要素があるのである。また、古いものを捨て去り新しいものを全面的に受けいれよ、ということとは納得できない」

11. 私どもは、以上のように語ったのであります。また、これからも同様に語るつもりであります。ただし、これは、あまり歓迎されませんでした。すなわち、西洋人たちは、その思っていたほど、私どもが従順でもなく、見習いもせず、言いなりにはならない、と考えたからです。それならば、なおさら私どもの「頑固さ」、「非受容性」、「排他心」にこだわって、私どもが理想的な学校教師(センセイ)として尊敬する一人の生涯を、ここに描くことにしましょう。それにより、日本の青少年の教育を気づかっている、よい西洋の友人に、一、二の手がかりを提供できれば幸いです。

P111 ~ 115

[コメント]

この文章のあとに「村の先生」として中江藤樹が紹介されている。この「代表的日本人」は、日本についての認識を深めてもらために 1908 年に英語で書かれた文章の日本語訳。日本人とは何か、何のために人は生きるのか、真のリーダーとは何か、真のエリートとは何かを学ぶのに最適の書。

— 2014 年 1 月 26 日 林 明夫記 —